

法然上人における大乘經典の受容について

石田 一裕

一、はじめに——インド仏教と浄土思想

仏教研究における「浄土教」や「浄土思想」は確固たる対象として存在している。その研究において主たる対象となるのは浄土三部經であり、またその注釈書、それに加えて阿弥陀仏や極樂浄土に関する様々な主張や分析、さらに実践を説く諸典籍である。

望月一九三〇は、浄土教が「単に弥陀浄土の信仰を意味するようになっていく」けれど、この語は「元來は諸仏一般の浄土に関する教義」を意味するものと指摘している（望月一九三〇…緒言）。このような視点に基づけば、その起源を問う研究はまさに望月自身が行なったように「仏陀論」「本願論」「浄土論」というテーマ設定のもと、様々な經典を分析する必要がある。しかしながら、その後の浄土教研究はこのような拡大的傾向のもとに進められてはいない。

このような浄土教の起源について、決定的な方向性を与えた研究が藤田一九七〇である。藤田は「阿弥陀仏の浄土に関する原始期の思想」（藤田一九七〇・三頁）として「原始浄土思想」を設定し、その解明を試みた。そのため一次資料として用いられたのは漢訳文献ではなく、サンスクリット語文献である。藤田の研究は従来の宗学的研究とは異なり、経文の伝統的解釈から離れ、批判的な文献読解を通じて、浄土教の起源をインド仏教史の中に位置づけようというものである。さらに藤田二〇〇七では、このような研究の補完と継承として浄土三部経を扱い、宗学的研究とインド学・仏教学的研究の二つの視点を勘案して浄土思想の展開を論じている。この研究においては、一九六八年に平川によって提起された大乘仏教の起源についての研究、いわゆる平川説に対する批判を通じて形成された諸研究が念頭におかれている。

初期大乘仏教の一つの流れとみなされる浄土教の研究は、当然、大乘仏教の起源の解明と切り離すことはできない。藤田二〇〇七は平川説に修正の余地があることを指摘し、大乘仏教の起源として「部派・在家起源説」という立場をとる（藤田二〇〇七・二七四頁）。浄土教の起源に関わる研究は、そのまま大乘仏教の起源に通じるものである。

下田二〇一三は歴史的な術語である浄土教や浄土思想という語に、藤田の研究が「近代仏教学の豊富な内実を付与した」（下田二〇一三・五頁）と藤田の一連の研究を高く評価する。上述のように藤田自身も宗学的研究とインド学・仏教学的研究の連絡という課題を念頭に置いているが、下田は藤田がそれを遂行したと評するのである。

さて、藤田によって原始浄土思想の研究がなされて以降、インド仏教における阿弥陀浄土思想の解明は（無量寿経）と（阿弥陀経）が主となった。一方で、望月の提示した視点を補完するような形で、仏教研究の様々な成果が挙げられている。また藤田一九七〇もその他の大乘経典を等閑視するのではなく、矢吹一九一一を基礎にして浄

土思想に言及する経論の一覧表を提示している。ここではこれらの資料に基づき、浄土三部経とその異訳以外で阿彌陀仏と極楽浄土を説く經典、またそれ以外の浄土思想に関する經典と、それについての研究を紹介しよう。

二、阿彌陀仏と極楽浄土を説く經典とその研究

阿彌陀仏や極楽に言及する経論は、藤田一九七〇の一覧表によると漢訳で二九〇、またサンسكريットでは三二を数える。その全てについて言及するのは紙幅の都合で不可能なので、後に検討する法然が引用する経論と、浄土教思想の研究において重要な位置を占めるものを中心に紹介しよう。具体的には『般舟三昧経』『維摩経』『法華経』『悲華経』の四種について概観したい。さらに阿彌陀浄土とは異なる浄土を述べる『阿闍世国経』についても言及しよう。

『般舟三昧経』

『般舟三昧経』は原始浄土思想を考えるにあたって重要な經典である。最古の漢訳經典の一つであり、初期の大乗經典と目される本経は、経名になっている「般舟三昧」を説示するものであり、修行者はこの三昧を實踐することで目の前に諸仏が現れる体験を得ることができるとする。その具体的な方法として、本経は阿彌陀仏に心を向け続けることでこの仏に出会うことができる」と説き、さらに出会ってから阿彌陀仏を思い続けることで極楽浄土に生まれ変わることができる」と説く。

本経の書誌については梶山一九九二にまとめられている。これによれば漢訳大藏経には四本があり、この中で經典ナンバー418の『般舟三昧経』、いわゆる三巻本がもっとも古いものと考えられている。この經典のサンスクリット本は Hoernle 1916が解読している。チベット語訳については Harrison 1990が校訂し英訳するとともに、詳細な解説を加えている。梶山一九九二はチベット語訳の一部を和訳し、吹田二〇二〇は三巻本の部分訳を行なっている。

『般舟三昧経』は支婁迦讖訳とされ、藤田二〇〇七が指摘するように「阿弥陀」という訳語をもちいる初期の經典である。三巻本と浄土教の関りについては、末木一九八九が般舟三昧と阿弥陀仏の関りを指摘し、吹田二〇二一もそれを支持している。この經典は『選択集』における八種選択の典拠となるものである。この点については後述する。

『維摩経』

浄土という言葉を考える際に欠かすことのできない資料が『維摩経』である。この經典は在家である維摩居士を主人公とし、空思想を非常に具体的な描写で描き出すとともに、不二の法門における菩薩道の実践を説くものである（高橋・西野二〇一一・三三三頁）。このうち第七章（羅什訳「觀衆生品」）では様々な仏があげられるなかで「阿弥陀」の名を確認できる。

本経は支謙訳『維摩詰経』、鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』、玄奘訳『説無垢称経』の三つの漢訳があり、チベット語訳も存在する。さらに一九九九年にサンスクリット語写本が発見され、二〇〇六年にはそれに基づいた校訂テキストが発刊された。この經典は現代語訳もなされており、チベット語訳からの翻訳として長尾一九八三が、またサ

ンスクリット語からの翻訳に高橋・西野二〇一一、植木二〇一九がある。

『維摩經』は支謙による翻訳で早くから中国にもたらされたが、大きな影響を与えたのは鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』である。工藤二〇一九は『維摩詰所説經』や『法華經』の注釈の研究を通じて、これらの經典が中国における浄土思想の形成にあたって大きな役割を果たしたことを指摘している。浄土教に関連するところでは道綽『安樂集』に『維摩詰所説經』の引用が数回確認でき、そのうちの一か所(大正47・8中)は源信『往生要集』に継承されている。この引用は經典原文が「雖知諸佛國」(大正14・55上)とあるが、『安樂集』は「雖觀諸佛國」となっており、『往生要集』もそれを踏襲している。つまり源信は羅什訳の原文ではなく、『安樂集』を再引用したと指摘できよう。

『法華經』

『法華經』は大乗仏教の中心を担う經典の一つであり、現在に至るまで大きな影響を持つ經典である。一仏乗の教えを巧みな譬喩によって説き明かし、生きとし生けるものが成仏する可能性を説き、また久遠実成の釈迦を明かす經典である。

本經の普門品には「即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處生蓮華中寶座之上」(大正9・54下)という一文があり、これは『法華經』の説く往生として浄土教に影響を与えている。

『法華經』の「阿彌陀」については、藤田一九七〇が阿彌陀仏の原語としてサンスクリット語の *amitayus* (無量寿仏) と *amitabha* (無量光仏) という二つを想定し、三部經以外にこの名が確認できる經典の調査を行っている。そして、前者の代表經典として『法華經』を挙げ、後者の代表に『華嚴經』入法界品を紹介している。なお辛嶋二

〇一四はこの藤田説を批判し、阿弥陀仏の原語を amītabha のガンダーラ語と想定した。そして、この語が偈頌で用いられる場合、韻律の関係で amītayus と似た発音となり、そのためサンスクリット語化される際に、この語に置き換えられた可能性を指摘する。壬生二〇二一はそれをうけ、初期無量寿経が阿弥陀仏の光明に主眼を置き、寿命は二次的な特性であると述べている。ガンダーラ語に端を発する阿弥陀の原語と、それが無量寿と無量光に発展する経緯については、いまだ不明な点も多い。『法華経』や入法界品の記述も、それぞれの思想を踏まえたいえで、amītayus や amītabha の語が用いられたことへの検討がなされるべきであろう。

また『法華経』については、普門品に説かれる観音菩薩の記述と、『大阿弥陀経』のそれが類似することが辛嶋二〇〇四で指摘されている。これは観音信仰が阿弥陀信仰とは独立して存在したもので、〈無量寿経〉や〈法華経〉がそれを取り入れたことを示唆するものである。

『悲華経』

『無量寿経』には阿弥陀仏の前世の物語として法蔵の説話が紹介される。しかしながら、阿弥陀仏の前世の物語は様々な経典に確認でき、法蔵説話はそのうちのひとつである。このような物語のなかで注目されるのが『悲華経』に説かれる無諍念王の物語である。

この経典はサンスクリット本、曇無讖訳『悲華経』と訳者不詳『大乘悲分陀利経』の二つの漢訳、そしてチベット訳が存在する。本経は阿弥陀仏や釈迦牟尼仏の前世の物語が説かれる。阿弥陀仏の前世は無諍念王という転輪聖王であり、『無量寿経』に説かれる四十八願と類似する誓願が説かれている。釈迦牟尼仏の前世は寶海梵志であり、五百誓願が紹介される。壬生二〇二二は『悲華経』は阿弥陀仏よりも、娑婆世界でさとりを開く釈迦牟尼仏の存在

を強調し、阿弥陀仏信仰を前提としながら「穢土で成仏した釈尊を再評価する目的」（二五〇頁）で成立した經典と指摘する。

この經典の先行研究は石上二〇一〇にまとめられている。着目すべきは〈無量寿經〉の本願と『悲華經』のそれとの対応関係についての研究である。『無量寿經』に説かれる四十八願は、『大阿弥陀經』などでは二十四願であることが知られている。『悲華經』はその中でも四十八願をベースにして、無諍念王の誓願を構築したことがわかっている。

壬生二〇二一はこれまでの研究を踏まえながら、『悲華經』と〈無量寿經〉が相互に影響を与えながら編纂された可能性を指摘する。また初期無量寿經から〈悲華經〉さらに『無量寿經』へと継承されていく阿弥陀三尊の展開の一端を明らかにしている。

『阿闍仏国經』

阿弥陀浄土教とは直接関係しないが、インドにおける浄土思想を考察する際には『阿闍仏国經』が重要となる。佐藤二〇〇五が指摘するように、仏教が展開した諸地域において阿闍仏が信仰された形跡は見出しがたいが、大乘仏教の黎明期に誕生したこの經典は、インドにおける浄土思想の起源に関わるものである。平川一九八九はこの『阿闍仏国經』と般若經を同一の系統とし、阿弥陀仏に言及する『般舟三昧經』や『大阿弥陀經』はそれと異なる系統とみなした。藤田一九七〇や佐藤二〇〇五も同様の理解をする。

『阿闍仏国經』は阿闍仏の誓願とその仏国土のすばらしさを説明する。佐々木二〇〇五は『大阿弥陀經』もまた同様のコンセプトを有するが、『阿闍仏国經』がさとりを開くための最高の環境を説くのに対して、『大阿弥陀經』

はすべての環境が最高であることを強調し、前者はさとするための手段としてそこへの生まれ変わりを説くが、後者はそこに生まれることが目的となつていて、前者はさとする点で相違があると指摘する。

『阿闍仏国経』と『大阿弥陀経』はともに最初期の大乗経典であるが、大乗仏教がはじめから他方仏国土や釈迦牟尼仏以外の仏陀を中心に編纂されたことは、その起源を探るうえで重要な観点である。

三、法然上人の大乗経典受用

法然の主著『選択集』は『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』を三部経と定め、また中国の浄土教祖師の典籍を引用しながら論を展開していく。これによつて念仏が阿弥陀如来、釈迦如来、さらに諸仏によつて選択されたことが明らかにされる。阿弥陀仏に関する様々な経論を用いて説き明かすこの書には、当然ながら、それに言及しない大乗経典の引用はほばない。

それでは法然はどのような基準で大乗経典を引用したのであろうか。大谷一九七三は法然の三部経選定を明らかにする中で、『往生要集』の影響力を明らかにしている。柴田二〇〇一は大谷の研究をうけ、『選択集』における正依・傍依の経論の選定過程と思想的意義に言及する。近年では南二〇一九が大谷の見解を支持しつつ、研究を進展させた。そこで『往生要集』第三大門冒頭において源信が紹介する極楽往生の証拠となる経論を確認し、法然遺文との関係を簡単な表にまとめよう。

番号	經名	確認できる法然遺文	備考
2 1	往生論	調査対象外	
1 12	無量清淨平等覺經	調査対象外	
1 11	大阿彌陀經	調査対象外	
1 10	般舟三昧經	往生要集詮要・觀無量壽經釈・阿彌陀經釈・法然聖人御說法事・逆修說法・選択集・登山状・安心起行作業抄・六字名号口伝・念仏算	
1 9	藥師經	逆修說法・法然聖人御說法事	
1 8	十往生經	阿彌陀經釈・選択集・浄土宗略要文・浄土宗略抄	いづれも『往生礼讃』の引用に含まれる
1 7	大集經	無量壽經釈・觀無量壽經釈・逆修說法・選択集	
1 6	發覺淨心經	なし	
1 5	稱揚諸佛功德經	無量壽經釈	
1 4	鼓音聲經	逆修說法・浄土初学抄	
1 3	小阿彌陀經	調査対象外	
1 2	觀經	調査対象外	
1 1	無量壽經	調査対象外	

3 10	如意輪（如意輪陀羅尼經）	浄土初学抄	典籍名のみ
3 9	不空絹索（不空絹索神変真言經）	観無量寿經釈	
3 8	十一面經	浄土初学抄	典籍名のみ
3 7	千手陀羅尼經	念仏大意	
3 6	無字寶篋經	なし	
3 5	三千佛名經	なし	
3 4	目連所問經	なし	
3 3	普賢願	浄土初学抄	典籍名のみ
3 2	四十華嚴經	法然聖人御說法事・逆修說法抄・金剛宝戒訓授章	
3 1	法華經藥王品	法 往生要集詮要・法然聖人御說法事・逆修說法	
2 7	攝大乘論彌陀偈	なし	
2 6	龍樹十二禮偈	なし	
2 5	寶性論	なし	
2 4	一切經中彌陀偈	なし	
2 3	十住毘婆沙論	往生大要鈔・往生浄土用心	
2 2	起信論	阿弥陀經釈	

3-11	隨求（金剛頂瑜伽最勝秘密成仏隨求即得 神變加持成就陀羅尼儀軌）	觀無量壽經釈・淨土初学抄	典籍名のみ
3-12	尊勝（仏頂尊勝陀羅尼經）	觀無量壽經釈・淨土初学抄	典籍名のみ
3-13	無垢淨光（無垢淨光大陀羅尼經）	觀無量壽經釈・淨土初学抄	典籍名のみ
3-14	光明（不空羅索毘盧遮那仏大灌頂光真言）	觀無量壽經釈・淨土初学抄	典籍名のみ
3-15	阿彌陀（阿彌陀仏根本秘密神呪經）	内裏問答の時、仰せられける御詞・御母子 往復消息・三箇条問答	

この表のうち1-1から2-7までは迦才『浄土論』が紹介する「十二經七論」である。3-1から3-15までは源信がそれらに加えた經典である。ここで考察すべきは三部經ならびにその異訳以外の大乗經典であるから、それは調査の対象外とした。

南二〇一五は『選択集』における八種選択の淵源に『往生要集』があることを指摘したが、法然が自身の思想を確立するため、資料となる大乘經典の選定については源信の影響を受けたことは間違いないであろう。

例えば1-7『大方等大集經』月藏分には「見佛小念見小大念見大」（大正13・285下）という一文があるが、『選択集』はこれを「大念見大佛、小念見小佛」と引用して懷感『群疑論』の解釈を紹介する。これは月藏分の經文がそのまま紹介されているのではなく、『往生要集』さらに永觀『往生拾因』にも引用される『群疑論』の一文であり、法然はこれによって經文を知ったと考えるのが妥当であろう。

『般舟三昧經』の引用も同様である。『選択集』において選択我名の根拠となるのがこの經典であり、『阿彌陀經釈』や『逆修説法』でも言及される。原文と諸典籍の引用文をまとめると以下の表のようになる。

典籍名	原文・引用文	出典
一卷本	阿彌陀佛報言「欲來生者、當念我名、莫有休息、則得來生」	大正13・899 上・中
三卷本	阿彌陀佛語是菩薩言「欲來生我國者、常念我數數、常當守念、莫有休息、如是得來生我國」	大正13・905中
安樂集	阿彌陀佛語是菩薩言「欲來生我國者、常念我名、莫有休息、如是得來生」	浄全1・696上
観念法門	阿彌陀佛報言「欲來生者、當念我名、莫有休息、即得來生」	浄全4・226上
往生要集	阿彌陀佛報言「欲來生者、常念我名、莫得休息、即得來生」	浄全15・108下
往生要集	阿彌陀佛言「欲來生我國者、當念我數數、常當專念、莫有休息、如是得來生我國」	浄全15・129下
往生拾因	阿彌陀佛語是菩薩言「欲來生我國者、常念我名、數數專念、莫有休息、如是得來生我國土」	浄全15・375上
阿彌陀經釈	彌陀自説言「欲來生我國者、常念我名、莫令休息」	浄全9・369上
選択集	彌陀自説言「欲來生我國者、常念我名、莫有休息」	浄全7・70
逆修説法	彼佛答言「欲來生我國者、當念我名、莫休息即得往生」	浄全9・396上

これによれば法然遺文の引用は一卷本と三卷本を合わせたような引用文となっている。往生要集は一卷本と三卷本の両方を参照したようである。『安樂集』や『観念法門』にも引かれ、また『往生要集』や永観『往生拾因』に引用される一文を、法然もこれらの典籍を通じて知ったと推測できる。上述のごとく法然は『往生要集』を通じて、阿彌陀仏に関する典籍を受用したと考えられ、『般舟三昧経』についても同様と考えるべきである。そのなかでも「阿彌陀佛報言」とある経文を「彌陀自説」と若干の手を入れ、自身の考えを裏付けるにふさわしい経文にした点

は法然の意図を表すものであろう。

『選択集』における『正法念処經』への言及も、同様に源信の影響を示すものと考えられる。『選択集』第十二章段では『觀經』に説かれる「深心因果」と「出世の因果」に分類し、前者について「世間の因果とはすなわち六道の因果なり。正法念經に説くがごとし」（聖典3・168）と述べている。

ここで『正法念処經』の經文が直接引用されるわけではないが、それを参照したことがうかがわれる。そして、これはおそらく『往生要集』を經由しての言及である。というのも『選択集』のこの文脈で用いる「六道因果」の語は「前の所説の如く、六道の因果不淨苦等なり」（淨全15・51上）と『往生要集』第一大門にもみられる語である。『往生要集』の第一大門では六道の姿が描かれるが、これらの記述は『正法念処經』によるところが大きい。さらに最澄『守護國界章』に「然彼六道因果之法、正法念經中已廣説」（大正74・179上12、13）とあり、六道因果を『正法念処經』と結びつけている。六道因果の語は經典には確認できない言葉であるが、智顛が『法華玄義』や『摩訶止觀』において用いており、これらの著作を經由して最澄に取り入れられ、それが源信に影響を与えたと考えうる。法然もその流れを受けていると指摘できよう。²⁾

さらに『守護國界章』からの影響と考えられるのが『阿彌陀經釈』における『入楞伽經』の引用である。これは龍樹が歡喜知を得て安樂國に往生したことを示す一分であるが、『守護國界章』に引かれるものと一致する。この文章は吉藏が『中觀論疏』（大正42・1下）ならびに『三論玄義』（大正45・6中）において言及し、空海も『辨顯密二教論』で紹介している。『阿彌陀經釈』の引用は『入楞伽經』よりも、最澄や空海の著作の引用と一致することから、日本における著作からの再引用と考えるのが妥当であろう。

法然は『逆修說法』初七日において「凡諸經中或有説往生淨土法、或有不説」（淨全9・386上）と述べている。こ

れは迦才『浄土論』や源信『往生要集』で紹介される経論を念頭に置き、それを法然自身も読解したことを示すものであろう。ここでは『法華経』薬王品の「即往安樂世界」の一文を引用する一方で、『華嚴経』については「普賢十願」のなかにそれが説かれていると示すのみである。『法華経』の経文を提示するのは、法然自身が比叡山において、それを読誦していたからと推測することができる。

いずれにしても法然の大乘経典の受用は、源信や天台諸師の著作あるいは中国論師の学説を直接的な情報源とし、そこを経由してインド撰述の大乘経典を受け取ったと考えることが妥当である。しかしながら、林田二〇一が「選択思想」の意義を指摘するように、「選択」というコンセプトによって、先学の用意した阿弥陀浄土に関する諸資料を活用し、往生浄土思想を仏教史の中に位置づけた点に、法然の獨創性を見出すべきであろう。

註

- (一) ただし『法華経』薬王菩薩本事品の「阿彌陀」については「amītaḥ」とする写本があることを指摘している。
- (二) 善導『観経疏』序分義では「深信因果」について二つがあると述べ、その一つに世間の因果を上げている。二つ目については省略されており、これについて良忠『伝通記』は「二つの因果があるというのに、出世因果について述べないのは、この経文の後に『観経疏』が読誦大乘勸進行者を釈すので、その義が明らかであるから省略した」（浄全2・282下）と述べている。良忠が『観経疏』が説示しない「出世因果」が省略されていると考えたのは、おそらく『選択集』の影響であろう。聖阿『釈浄土二藏義』は「深信因果」を「深信因果には世と出世とあり、六凡と四聖とは是れ十界なり」（浄全12・17上）とのべており、二種の因果を十界と結びつけて理解している。智顛『摩訶止観』は「四諦の名相は大經聖行品に出ず。謂わく、生滅、無生滅、無量、無作なり。生滅とは苦集是れ世の因果、道滅は出世の因果なり」（大正46・5中）と述べ、四聖諦を世因果と出世因果に分けている。また六道と

四聖を十界とするのは智顛の説であり、法然の「深信因果」の解釈にはこれが影響を与えた可能性がある。

参考文献

- 石上和敬二〇一〇 「悲華經」の先行研究概観、『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』二二六、一―四二
- 植木雅俊二〇一九 『サンスクリット版全訳 維摩經 現代語訳』、角川ソフィア文庫
- 大谷旭雄一九七三 「法然上人における浄土三部經の選定と呼称」、『法然浄土教とその周縁』坤、山喜房佛書林、二〇〇七に再録
- 梶山雄一一九九二 「般舟三昧經」、『浄土仏教の思想』第二卷、講談社
- 辛嶋静志二〇〇四 「『大阿弥陀經』 訳注(五)」、『佛教学総合研究所紀要』一一、七七―九六
- 辛嶋静志二〇一四 「大乘仏教とガンダーラ―般若經・阿弥陀・觀音―」、『創価大学国際仏教学高等研究所年報』一七、四四九―四八五
- 工藤量導二〇一九 「智顛『維摩經文疏』における淨穢の議論」、『印度學佛教學研究』六八一、一六八―一七三
- 佐藤直実二〇〇五 「閔仏信仰の諸相」、『日本仏教学会年報』七〇、一二九―一四一
- 柴田泰山二〇〇一 「選択集」第一章段説示の「所依の經論」について、『法然浄土教の思想と伝歴』、山喜房佛書林
- 下田正弘二〇一三 「浄土思想の理解に向けて」、『仏と浄土…大乘仏典Ⅱ』(シリーズ大乘仏教5)、春秋社、三―七八
- 末木文美士一九八九 「般舟三昧經」をめぐる、『インド哲学と仏教…藤田宏達博士還暦記念論集』、平楽寺書店、三―三三―三三二
- 高橋尚夫・西野翠二〇一一 『梵文和訳維摩經』、春秋社
- 長尾雅人一九八三 『改版維摩經』、中央公論新社
- 林田康順二〇一一 「法然上人「選択」思想成立の背景」、『佛教論叢』五五、一九〇―一九八
- 平川 彰一九八九 『初期大乘仏教の研究Ⅰ』(『平川彰著作集』3)、春秋社

- 吹田隆徳二〇二一 「般舟三昧の原様相」、『佛教大学仏教学会紀要』二六、一五五—一八〇
 藤田宏達一九七〇 『原始浄土思想の研究』、岩波書店
 藤田宏達二〇〇七 『浄土三部経の研究』、岩波書店
 南 宏信二〇一五 「法然「八種選択義」の淵源：『往生要集』から『選択集』へ」、『浄土宗学研究』四一、八九—一〇九
 南 宏信二〇一九 「法然における「浄土三部経」観と「選択付属」」、『印度學佛教學研究』六八一—、五三—五八
 壬生泰紀二〇二一 『初期無量寿経の研究』、法蔵館
 望月信亨一九三〇 『浄土教の起原及発達』、共立社
 矢吹慶輝一九一一 『阿弥陀仏の研究』、丙午出版社
 Harrison, Paul 1990 *The Samadhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present: An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Sammukhāvasthita-Samādhi-sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series V). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. [Ph. D. thesis Australian National University, 1980]
 Hoemle, Rudolf 1916 *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern, Turkestan* vol.1, Oxford.

キーワード 所依の経典、大乘経典、往生要集、法然